資料

愛知県における女子青年団の学習活動と農村婦人の養成
― 安城女子青年団を中心に ―

Learning Activities of the Young Women's Associations and Training of Women in Agricultural Villages in AICHI Prefecture : Focusing on the Young Women's Associations in ANJO City

田中 卓也
TANAKA Takuya

（2021年４月28日受理）

要旨

碧海郡安城町（現在の愛知県安城市）にかつて存在した「安城女子青年団」は、男子青年団の発足よりも遅く結成された。同団は地元の農村女子の主婦としての養成の場として大きな意義があった。「日本のデンマーク」と称される安城の農業実践を通じて、知識を習得する女性が多く、農業関連の講習会や学習会などに参加し、さらなる知識の習得を志した。安城農林学校を拠点に地元の修養団活動が盛んになる中、女子青年団員も自己修養に努めた。農村女子になるべく彼女らは、中等教育を受ける機会に恵まれてはいなかったが、学習活動を通して教養を習得した。彼女らは教養を身に付けることで、主婦としての生き方とは何かを考え、新しい家庭生活を目標に幸せを見つけようとした。

キーワード：処女会、女子青年団、講習会、農村婦人、学び

Ⅰ．はじめに― 本研究の目的と先行研究の検討 ―
Ⅱ．若者組織の変容― 若者組から処女会へ ―
Ⅲ．安城における処女会・女子青年団の結成
Ⅳ．安城と修養団活動
Ⅴ．雑誌を通じた教養の習得―『処女の友』･『女子青年』･『青年（女子）』を中心に ―
Ⅵ．「大日本青少年団」の結成と女子青年団の様相
Ⅶ．おわりに― 安城女子青年団の学習活動の意義 ―

Ⅰ．はじめに
―本研究の目的と先行研究の検討―

本研究では、おもに近世以降における日本の若者組織の変遷を辿りながら、処女会や女子青年団の組織化がどのようになされたのかを考察および検討するものである。また処女会および女子青年団活動を通じて、「農村の主婦」がどのように養成されたのかについて見い出すものである。

「安城女子青年団」の存在した愛知県安城市は、愛知県中部に位置し、現在では人口18万人程度の都市となっている。江戸時代中頃より新田開発が進み、隣接する岡崎、西尾地域とあわせ「三河木綿」で有名な綿作の先進地として知られるようになった。明治期になると明治用水の建設に伴い、碧海台地が大きく開墾され、農業生産性の向上をもたらした。また繊維産業としての紡績工場・製糸工場も点在し、農村の年若い少女らが女工として勤務した。これに伴い当時の安城村は碧海郡の農村地帯の中心に発展し、1889（明治22）年の東海道本線の開通や安城村のほか8村の合併により、1899（明治32）年に町制が施行され、「安城町」が誕生することになった[1)]。

さて日本の近代における青年団の研究については、これまでに多くの蓄積がすでに存在している。また日本教育史や社会教育史研究における通史なども存在している[2)]。「青年団」に関する先行研究には、これまでに多くの蓄積が存在している。安藤耕己「戦後における戦前期青年団指導者の『復権』と『協同主義』―主に1960年代までの動向に着目して―」『日本社会教育学会紀要』（第46巻、2010年）や佐竹智子「明治期における青年団の生成と展開」『広島大学大学院教育学研究科紀要（第三部、第６号、2011年）、同「山本瀧之助における初期青年教育論」中国四国教育学会『教育学研究ジャーナル』（第7巻、2010年）、多仁照廣（研究代表者）ほか「地方青年団報と青少年教育の実証的歴史研究」（文部科学省科学研究費補助金＜基盤研究C＞2001年～ 2003年）などが代表的なものである。女子青年団の研究については、渡邊洋子「1940年代前半期の女子青年団運動の指導理念と事業（１）―『国民化』とジェンダーの問題を考える手がかりとして―」（『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』2002年）では、「第二次世界大戦期の女性にとっての『国民化』とその内実と具体化の様相を1941年1月に大日本青少年団の指導理念と事業展開を通して考察」している[3)]。そこでは「男性の代替労働力としての側面と、女子ならでは軍事支援・銃後協力に全精力を傾ける方向で展開した」ととらえている[4)]。

また、神田より子「日本における第一次世界大戦勃発に至る女子青年団とその雑誌の変遷」（加納実紀代・研究代表者「日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B研究課題」「表象にみる第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」）では、『処女の友』誌や『女子青年』『青年（女子版）』を資料として取り扱いながら、女子青年に期待されたことは、国家に忠誠を尽くすことと同時に、良質な国民を生むことがあった。（中略）しかし変わったのは大日本青少年団という大きな枠の中で、女子青年にも青年団員としての自覚を促し、臣道実践と、教養を高めるために輪読会をくようにと進めて

1) 「安城市ホームページ」（2021年3月20日閲覧）（www.city.anjo.aichi.jp）

2) 通史としては、国立教育研究所編『日本近代教育百年史７　社会教育１』（国立教育研究所、1973年）、同『日本近代教育百年史８　社会教育２』（国立教育研究所、1974年）、『近代日本教育史事典』（平凡社、1971年）、宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968年）、大串隆吉・田所祐史『日本社会教育史』（有信堂高文社、2021年1月）などが存在する。

3) 渡邊洋子「1940年代前半期の女子青年団運動の指導理念と事業（１）―『国民化』とジェンダーの問題を考える手がかりとして―」（『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』2002年、3ページ）。

4) 同上、39ページ。

5) 神田より子「日本における第一次世界大戦勃発に至る女子青年団とその雑誌の変遷」（加納実紀代・研究代表者「表象にみる第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B研究課題）報告書、30ページ）。

いるなど、日本国民としての期待が見えてくる」と雑誌との関係から明らかにしている[5]。また竹中理恵「大正中期から昭和初期における非就学成年女子の身体に関する議論について―『処女の友』(1918－1941）及び『女子青年』(1931 ～ 1941）から―」(『スポーツ史研究』(第17号、2004年）では、「体育、スポーツ史を明らかにする立場から、まず女子青年団体の中央組織である処女会中央部の機関誌『処女の友』及び『女子青年』を用い、(中略）非就学青年女子の身体についてどのように議論が展開されていたのかを明らかにすることを目的とし」ており[6]、「非就学青年女子に対し、貞操観念や衛生知識を浸透させ、自分のからだや性に対する『自覚』を促す必要があった」とみなしている[7]。

さらに岡田洋司「1920年～ 1930年代農村社会における高等女学校の成立と展開（３）愛知県安城高等女学校における教養教育と農業教育」(『コミュニティ政策研究』第13号、2011年）においては、安城高等女学校の成立と変遷を中心にしながら、安城という農村都市ならでは農業を中心とした女学校教育についての特徴を明らかにしている[8]。しかしながら、女子青年団員の女性らは何を目的に活動し、青年団で得た知識をどのようにいかそうとしたのか。この点に関して執筆者は農村婦人として地域に根付きながら、自立した女性になろうと必死に生きようとしたことから、大きな関心事となった。しかしながらこの点についての研究の詳しい事例も少なく、先行研究で踏み込まれていない開拓の余地が残されているのではないかと考える。そこで本稿では、おもに明治期から昭和戦前期までの時期に限定し、愛知県安城市で古くから活動し、現在でもなお活動を続ける「安城女子青年団」に着目し、同青年団の歴史的変遷を辿りながら、女子青年団の活動及び内容と女性の生き方にその後どのように影響を与えるようになったのか、について見いだすことができるように努めたい。

Ⅱ．若者組織の変容―娘組から処女会へ―

１．娘組の誕生

日本教育史研究の基本文献や先行研究として知られる国立教育研究所編『日本近代教育百年史』や『近代日本教育史事典』（平凡社）によると、江戸時代には農村に「娘組」が存在したといわれる通説が既に存在する。「娘組」については『ブリタニカ国際大百科事典小項目事典』によると、「集落または村ごとに組織された未婚女子の集団」であり、「成人の承認を受けると加入が許され、娘宿に集り、あるいは寝泊りして、結婚に関する知識を教えられた苧積などの作業に従ったりする」と説明している。

また小学館の『大辞泉』によれば、「村落事に組織される未婚女子の集団。娘宿に集まって夜なべ仕事をする」と記されている。さらに『世界大百科事典』によれば、「娘は、数え年15歳前後に成女式（成年式）を済ますと娘組または娘宿へ参加し、通常は結婚を機会に脱退する。したがって娘組の多くは、その名称が示すように未婚者集団である」とされている。若者組や娘組も、共通していることとして、15歳頃から入会が可能となり、村の仕事や大人になるために必要な知識を習得した。また構成員同士での性の知識の習得も欠かさず行われており、娘組では婚前交渉や、避妊を含め村の維持・繁栄のために、学習機会を通じ子孫を残すということについても念頭に置かれていた。

娘組の資料の事例は僅少である。三重県桜村では「数えの12、3歳から結婚までの娘で

6) 竹中理恵「大正中期から昭和初期における非就学成年女子の身体に関する議論について―『処女の友』(1918－1941）及び『女子青年』(1931 ～ 1941）から―」(『スポーツ史研究』第17号、2004年)。

7) 同上、87ページ。

8) 岡田は、安城の歴史や人物に関する著作として、このほかにも「山崎延吉における農本主義理念展開の場としての“村”“町”」安城市歴史博物館『研究紀要』第19号、2012年)、同『農本主義者山崎延吉“皇国”と地域振興』(未知谷、2010年)、同『ある農村振興の軌跡―日本のデンマークに生きた人びと』（農山漁村文化協会、1992年）などを数々執筆している。

組織された『娘組』や『娘宿』があり、娘達が夕食後集まって針仕事や糸繰りや粉ひきなどの仕事をしながら歓談して帰宅、また寝泊りをしていたこと」が知られている。風紀を乱すという理由から一時廃止される方向に向かうが、近隣の養蚕農家の子女を中心に処女会のような組織が徐々に形作られることになった。また桜村の製茶工場、製糸工場の女工らは寄宿舎生活をしていたこととも関連し「処女部」の組織が形成されていたといわれている[9]。

２．処女会の組織化

かくして大正時代に入ると「処女会」の呼称のもと、全国的に増加の傾向となった。処女会が村落に成立し、普及するようになった。しかしながら資料が僅少のため実証には乏しい。先述の『日本近代教育史事典』には、1918（大正７）年に処女会の中央組織であった「処女会中央部」が設置されたことが記されている。処女会の名称以外にも、「少女会」、「娘の会」、「女子同窓会」と呼ばれていたようであり、未婚の女性以外にも集まっていた形跡がうかがえるかもしれない[10]。静岡県の「稲取村処女会」では、「本会は女子の徳行を進め家事経済看護育児の方法を教へ併て小学校退校後の女子をして学校に於て受得したる品行を益々上進せしむるを以て目的とす」とし、農村の女子に必要な基礎知識や技能を教え、良妻賢母になりえる女性を育成した[11]。

また「広村処女会」では、「年一回の処女大会、道徳、宗教関係の講演のほか臨時に幻燈会が開催される講話会、それに遠足旅行などがその主なもの」であったとされ、活気を呈した[12]。証明する資料は僅かであるが、娘組や処女会の事情が垣間みれる。

3．天野藤男の努力と工場内処女会の設置

処女会の組織化については「処女会の父」とよばれた天野藤男の活躍が大きい。天野は、静岡県庵原郡庵原村（現在の静岡市）に誕生し、地元の小学校教員として勤務した後、宮内省へ出仕していた漢学者の国府種徳に才能を見出され、内務省地方局の嘱託職に任じられた。天野は、これに伴い地方の青年団、処女会の指導に当たり、1918（大正７）年の処女会中央部の結成に力を注いだ。

天野は「青年団体ノ設置ハ今ヤ漸ク全国二亘リ其ノ振否ハ国運ノ伸暢地方ノ開発二影響スル所殊二大ナルモノアリ」とし、「青年ノ活力ガ国家ノ進運ヲ支配スルトイフナラバ処女ノ健康、能力ハ一国ノ進運ヲ支配スルトイフテモ過言デハナイ」と述べ、処女会の組織化を主張した[13]。

また農村地域においては、農事経済の充実のように副業の奨励や生産活動の訓練などが実施された。女子青年の地域に密着しながらの組織化に基本を置きながら、女子青年団体が統一されていく方策も示されることになった。また彼女らは家事や農事の余暇には、農村婦人としての基礎教養の習得が目指された。また青年団との提携・協調も求められることになった。処女会はさらに全国的な普及を目指すため、1918（大正７）年に『処女の友』を発行し、「全国婦女訓」の制定や「処女会歌」の制作も行われた。さらに紡績工場、製糸工場勤務の女工らのストライキが繰り広げられないように「工場（内）処女会」の設置が相次ぎ、工場巡回視察講演、女工対象の修養講演が行われた[14]。「工場内処女会」はやがて修養団活動の影響を受けていくこととなる。

---

9) 「処女会設立の時代背景」（「桜郷土史研究会ホームページ」（www. sakuracom.jp）、2020年8月25日閲覧。

10) 山本瀧之助（1873 ～ 1931）は、広島県沼隈郡千年村（現在の広島県福山市沼隈町）に生まれ、郷土の青年教育に尽力した社会教育家であり、青年団活動の創始者のひとりとして活躍した人物である。当時上級学校に進学できなかった在損青年の実情と青年の意識を世に訴えた。この努力が結実し、地方改良運動のなかに青年団運動を位置付けることを可能にした。著書には『田舎青年』がある。（「山本瀧之助関係資料」（www. city.fukuyama.hiroshima.jp）から抜粋。2021年3月20日閲覧。

11) 前掲2)、『日本近代教育百年史７　社会教育１』1042ページ。

12) 同上。

13) 同上、1044ページ。

4. 大日本連合女子青年団の結成

かくして山本の影響を受けた田沢義舗[15]は、さらなる全国組織化を図るべく全国の各青年団に呼びかけ、「大日本連合青年団」の結成に乗り出した。全国に散らばる各青年団が、大組織のもとで統一される契機となった。また後を追うように1927（昭和２）年に「大日本連合女子青年団」もすぐさま結成に至った。女子青年団では、処女会の組織の継続発展を名目にし、女性の婦徳の涵養を目的として、「修養」が重要視された。また良妻賢母の思想の受容、認識の徹底も図られた。

満州事変を契機として十五年戦争に突入し、「五・一五事件」、「二・二六事件」などの事件が頻発するなかで民主主義は否定され、やがて軍国主義化したわが国では、青年団は官製化が進むようになり、国策への協力団体としての機能・活動を余儀なくされた。

Ⅲ．安城における処女会の成立

１．安城における娘組の存在と女子会の設立

『安城市史』によれば、近世の安城においても既に娘組が存在していたと記述されている。しかし青年団とは異なり、近代にはいるまでは娘組は目立った活動は資料からは見当たらない。

日露戦争後の1909（明治42）年に「女子会」が発足した。それは「小学校教員が行う補習教育・裁縫教育のようなもの」であった[16]。また安城町や桜井村では各小学校において「女子会同窓部」が組織されるようになり、「講演・講話や『蓄音器』などによる娯楽も提供された」といわれる[17]。これを基礎にしながら「未婚の女性を対象とする女子会・処女会がつくられ、講演や料理講習会、あるいは小学校の科目の補習などがおこなわれた」[18]。かくして地元の小学校教員の手により、女性の質の向上が図られることになった。当時安城第一尋常高等小学校訓導であった畔柳健治は、女子会の設立の中心人物であり、多くの小学校教員に呼びかけ、女子教育に力を注いだ。小学校教員が深くかかわった経緯は、安城の地に女子のための農業補習学校が設立されなかったことに起因としている。

2. 安城町女子青年団の結成

女子会・同窓部女子会を基本に1925（大正14）年に「安城町処女会」の結成を見ることになる。この処女会は、1927（昭和２）年に「大日本女子連合青年団」の発足を受け、同町内の明治村、桜井村、矢作町、依佐美村の各処女会は「安城町女子青年団」として改組された[19]。女子青年団の結成は、男子青年団に準じた形式を採用し、副会長は婦人会長がこれに就任した[20]。

---

14) 大正期から昭和戦前期において、当時の紡績工場や製糸工場等では、労働争議が頻発していたことから、労働争議の未然防止を目的に設置されることが多かった。

15) 田澤義舗（1855 ～ 1944）は、大正期から昭和初期にかけての官僚・社会教育家であり、青年団運動や青少年教育に尽力した人物しても知られ、「青年団の父」と称された。静岡県安倍郡長時代には、地方農村に学校教育と無縁であった勤労青年に注目し、教育や自己鍛錬の機会を与え、安倍郡青年団の指導や宿泊講習会などを開催した。スイスのジュネーブでの国際労働者会議への参加や日本青年館の建設にも尽力した。（鹿島市史資料編第４集『鹿島の人物誌』1987年）より抜粋。

16) 『新編安城市史』（第3巻通史編近代）、458 ～ 459ページ。

17) 同上。

18) 同上。

19) 同上。

20) 同上。安城の事例のように処女会から女子青年団になった事例は存在する。堀口知明「地域婦人団体の成立と展開（２）―とくに処女会（女子青年団）を中心にして―」（『福島大学学芸学部論集』第15号、1965年、11 ～ 12ページ）によると、福島県内の河沼郡広瀬村について「大正十四年広瀬処女会と改称し、内容の革新を図り、展覧会、運動会、巡回図書、敬老会等をなし、昭和二年に広瀬女子青年団と改称した」とあるし、また同じ河沼郡若宮村においても「大正八年九月（中略）牛川処女会、五の併処女会も発会式を挙行し、大正十四年になると両処女会合併して若宮処女会と称し、昭和三年九月に若宮処女会を若宮女子青年団と改」めたと記述されている。

女子青年団の入団の年齢については、「農村に住む14歳から25歳までの未婚の女子」であり、小学校卒業後に中等教育を受けない未婚の女性らが加わった[21]。女子青年団は実業補習学校や青年訓練所、青年学校などの学校教育機関と結びついていった男子青年団とは異なる性格があった[22]。さらに大正期にみられる都市に存在した「新中間層」の女性とも異なるものであった[23]。

「女子青年団」の目的としては、「婦徳の修養に努め他日良妻賢母たるの素質を養成する」ものであり、料理講習会や作法講習会が行われた[24]。またこのほかにも「見学旅行、軍事援護活動などの公的な行事にも参加を余儀なくされた。ときには社寺の清掃活動、農事託児所の奉仕活動なども行われていた」ようである[25]。

３．講習会の実施

安城女子青年団はどのような活動がなされていたのであろうか。『安城町青年団史』（第1巻）には、「講習会」の記事が掲載されている。以下にみてみることにしたい。なお当時は、「処女会」での記載となっている[26]。

第一回
一、会場　碧海説教場
一、月日　大正十四年十二月二十日午後一時より
一、講師　社会教育研究所主幹　小尾晴敏
一、会員　安城町青年団員及同処女会員
　計三百名
　発会式
　　１．開会の辞　町長
　　２．講師紹介　海江田本県社会教育主事
　　３．講演　男女青年団調査の趣旨及小尾晴敏
　　４．所感　新愛知新聞記者　石原由三郎
　　５．閉会の辞　後藤副団長

第一回の講習会は、碧海説教場にて「青年団員及同処女会員　計三百名」を対象に開かれた。「社会教育研究所主幹小尾晴敏」を講師として、「男女青年団調査の趣旨」に関する講話が実施された。小尾晴敏は、田尻稲次郎、安岡正篤らとともに蓮沼門三主催の修養団活動に身を置き、農村の改良や、青年指導の経験をいかしながら、青年団の講習会にも招聘されていた[27]。小尾の講演内容は詳しくはわからないが、青年団員のあるべき姿、責務などについて話したのであろうか。講習会は1929（昭和４）年まで計4回開催されており、男女青年団員がともに出席を求められた。

第二回講習会でも先述の小尾の講演が行われた。二回目の講習会は1926（大正15）年2月15日から17日までの3日間の開催（昼夜開催）であった。15日の昼の部は午後0時30分から午後５時までの4時間30分、夜の部は午後6時から10時までの4時間であった。

二日目・三日目は昼の部は午前9時から午後5時までの8時間、夜の部は午後6時から９時までの3時間であった。ほぼ一日を通しての講習会であったことがわかる。その対象は青年団員、処女会全員であった。午前の部ではおもに講習が、午後の部では懇談、研究、娯楽の時間にあてられた[28]。時折であるが、安城町第一分団から第六分団も午後の部に参加したいたこともわかっている。

第三回講習会は、場所は同じく碧海説教場で、1927（昭和２）年1月24日の1日のみの開催であった。開催内容の記載は不明である。男子青年400名、女子青年200名の参加があった。第三回の講習会では「午前十時より処女会総会」が催され、「１．会長挨拶　２．太行

21) 前掲2)、国立教育研究所編『近代日本教育百年史７　社会教育１』290～291ページ。
22) 同上。
23) 同上。
24) 同上、460ページ。
25) 同上。
26) 安城市青年団編『安城町青年団史』（第1巻）1930年、395～396ページ。なお引用資料の漢字については、執筆者の手により旧字体を新字体としている。
27) 「SYDかわらばん」（最新活動情報　第41号、2020年7月20日号）。SYDとは修養団の頭文字をとったものである。
28) 前掲26)、『安城町青年団史』（第1巻）、392ページ。

天皇奉悼会奉行　３．講話　作法について安城高女　田中たま」とある[29]。「講話」で「安城高女　田中たま」の記載が目を引く。地元の高等女学校生徒が講師となっていることから、地元の女子教育に貢献していることがうかがえるのではなかろうか[30]。

第四回講習会は、1929（昭和４）年1月10日から2日間開催された。男子女子青年団員と青年団役員を対象とした会であった。内容は「十日午後一時より　講話　人生観　小尾晴敏　娯楽、遊戯及唱歌　同、十一日午前十時より　講話　小尾晴敏　懇談　幹事懇談」となっていた[31]。小尾が両日講話を行っており、青年団員のなかで小尾の存在が大きくなっているのに気付く。

第五回講習会は1930（昭和５）年2月26日より2日間にわたり、安城高等女学校を会場に、開催された。同講習会は男子女子青年団員全員対象ではなく、男子女子青年団幹事のみの対象の幹部講習会であった。「二十六日午前十時より　講話　小尾先生　午後、三河食品会社にて昼食後講話（女子）」とあり、小尾の講話と会社見学が実施されている。

『女子青年団修養の栞　愛知県連合女子青年団　昭和十年三月改訂増補』という栞が残されている[32]。『女子青年団修養の栞　愛知県連合女子青年団　昭和十年三月改訂増補』（名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵）の目次を見てみると「詔勅」、「訓令」、「通牒」、「宣言」、「決議」、「御製御歌」、「詩歌」、「俳句」、「修養詞」、「静座と朗誦」、「歌謡」、「附録」からなる全100ページのものであることがわかる[33]。

「詩歌俳句」では、「詩」についてみると、儒学の大成者であった朱熹（朱子）の「青年易老学難成　一寸光陰不可軽」の著名な作品をはじめ、陶淵明、吉田松陰の句を合わせ6句が掲載されていた[34]。「歌」についてみると、日新公の「いにしへの道をききてもとなへても我わこなひにせすはかひなし」をはじめ糟谷磯丸、菅原道真、源光圀（徳川光圀―執筆者註）、福場美静、太田道灌、源実朝、本居宣長、熊澤蕃山、佐久間象山、坂本龍馬、落合直文、渡邊崋山、鳥居強右衛門、大江千里、梅田雲浜、佐佐木信綱らの作品がおよそ二種ずつ掲載されていた[35]。女子青年団員らは、筆記したり、または暗誦を試みたり、さらには朗読などを行ったのであろう。「最明寺教訓書」によれば、「親の教はかりそめに、そむくべからず。いかなる親なりとも、我が子に悪しかれと思ふものなし心を静めて目をふさぎよく考ふべし。あしき子を見てなげく親の心如何あるべきぞや。たとひひがごといはるるとも。心に従ひてたがはざるこそ孝行の道なれ（中略）何事につけても親の心にしたがひ孝行をつくすべし」と述べられており、親の教えを批判せず、親が間違った発言しても、決して反抗すべきではないことを紹介している。何事も親の言うことを聞くことこそ、親孝行であると文末でまとめれている[36]。さらには「一　うそをいふべからず候」、「二　君の御恩は忘べからず候」、「三　父母の御恩は忘るべからず候」、「四　師の御恩は忘るべからず候」、（中略）「七　幼者を侮るべからず候」、「八　おのれに快からざることは他人に求むべからず候」、「九　腹を立てるは道にあらず候」、「十　何事も不幸をよろこぶべからず候」、「十一　力の及ぶ限り善き方に尽くすべく候」などが江戸時代の武士であった山岡鉄舟による「二十の修身則」が掲げられ、人としての修養を積むことが求められた[37]。さらには「静座は心身を鍛錬して其の機能を増進し、天賦の能力を発揮し、眞我を認識し、

29) 前掲26)、『安城町青年団史』(第1巻)、395ページ。
30) 地元の高等女学校とは「安城高等女学校」のことである。同校卒業生は託児所のお手伝い（見習い）として活動に精を出したり、農村の主婦の保育の講習などを行っていた。『新編安城市史』(第3巻通史編近代)、498 ～ 499ページ。
31) 前掲26)、『安城町青年団史』(第1巻) 396ページ。
32) 『女子青年団修養の栞　愛知県連合女子青年団　昭和十年三月改訂増補』（名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵）。
33) 同上、1ページ。
34) 同上、41 ～ 42ページ。
35) 同上。
36) 同上、44ページ。
37) 同上、45ページ。

人生の深き意義を悟るための霊妙なる修法」をまとめた「静座十則」、「小林一郎朗誦　心の力」、「田澤義舗　大いなるもの」、「西条八十日本」といった「修養詞」も掲載された。田澤は、修養団創設者の蓮沼門三の指導を受け、修養団活動に取り組んだ人物であり、修養団とのつながりを感じさせる。「朝の朗誦」も田澤による修養詞であり、同じく掲載されている[38]。「郷土賛歌」、「君が代」も同じく掲載されていた。大正期から昭和戦前期に作詞家・童謡家で活躍した西条八十の修養詞も目を引くものである。

また講習会以外にも1927（昭和２）年7月19日に岡山県連合青年団員との「相互講習会」が開催され、岡山県連合青年団・愛知県連合青年団・安城町青年団の共同主催での「一夜鍛錬講習会」も行われていたようである[39]。

一夜講習会日程案

第一日　受付開始　午前九時
　人員点呼諸注意　午前十時　一時間
　開会式
　一、一同敬礼
　一、遥拝
　一、国歌斉唱
　一、勅語奉読
　一、令旨奉読
　一、開会の辞
　一、会長告示
　一、青年団歌合唱
　一、一同敬礼
昼食
講演　午後一時　二時間
音楽　午後三時　一時間
作業　午後四時　一時間
体操遊戯　午後五時　一時間
夕食　午後六時
講演　午後七時　二時間
音楽　午後九時　五〇分間
　整座遥拝朗誦　午後九時五〇分
　一〇分間
　就寝

第二日
　起床、洗面、整理　午前五時
　体操
　静座、遥拝、朗誦
　朝食　午前七時
　講演　午前八時　二時間
　音楽　午前十時　一時間
　協議　午前十一時　一時間
　昼食
　感想懇談　午後一時　二時間
　閉会式
　整理解散

この案に基づいて行われた「一夜講習会」では、初日の内容としては「修養講話」、「国民体操」、「感想懇談」、「岡山青年団歌」、「三河男児の歌」、「尊く生きん」（合唱）、「静座」、「遥拝」、「心の力第一、第二章」（朗唱）であり、二日目には「農林学校」、「農事試験場」、「青年訓練所」、「産業組合連合会」、「町農会館」等の見学が翌日行われた。青年団員の相互交流や青年団員としての自覚を促すために有意義なものであった。また「優良青年団見学」（1929年）なども行われた。また「講習上の注意」では、「一、態度につきて　イ、真面目で真剣なること　ロ、常に愉快な気分であること　二、起居動作について　イ、規律正しく行動すること　ロ、座作進退は機敏なること　三、団員相互について　イ、親和融合の気分を持つこと　ロ、相助け相譲り相愛すること」と明記されており、青年団員は厳格な指導のもと講習を受けていたものと考えられる[40]。食前、食後にも「食事訓」を読み、日夜修養に励むことが求められていた。

38)『女子青年団修養の栞　愛知県連合女子青年団昭和十年三月改訂増補』（名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵）、49～56ページ。

39) 同上、94～95ページ。なお引用資料の漢字については、執筆者の手により旧字体を新字体としている。

40) 同上、96ページ。

４．家庭教育の振興と修養の重視

1930（昭和５）年11月4日に「第十一回大日本連合女子青年団大会宣言決議」がなされた。「宣言」では「今後益々修養を励んで国体の発達に力を致し各々其の本分を尽し、以て御令旨に奉答せんことを宣」誓した[41]。なお「一、女子青年団体の経営を合理化する事　二、自奮自励の精神を発達する事　三、公共生活に対する適切なる訓練を行ふ事」が示された[42]。

また愛知県連合女子青年団では同年11月22日に「愛知県連合男女青年団第四回修養大会に於ける宣言決議」がなされた。「決議」によれば「一、国民精神ヲ作興シ義勇奉公ノ誠ヲ致スコト　一、職業ニ精進シ発明創作ニ努力スルコト　一、公民的修養ニ心掛ケ自治ノ本義ヲ完ウスルコト」とあり「公民的修養ニ心掛ケ」る必要性が説かれた[43]。

翌年には各市町村、各学校に向け「家庭教育の振興」が企図され、1931（昭和6）年2月10日に、「家庭教育振興ニ関スル訓令」が発令された[44]。「今日動もすれば放縦に流れ詭激に傾かんとする風あるは家庭教育の不振之か重要原因を為す」と捉えられ「家庭は実に修養の道場たるの観を呈せり」ということから、「学校教育の勃興と共に世上一般教育を以て学校に一任し家庭は其の責に与からさるか如き情勢を馴致せり」と学校教育と家庭教育に今一度力をいれながら、「家庭の生活の改善を図るは実に教化を醇厚にする所以なるのみならすまた実に国運を伸長するの要訣たるを疑はず」ということであった[45]。家庭生活の改善こそ家庭教育の中心であると述べている。当時は女子青年団のほかに「婦人団体」も存在したが、同訓令によれば「婦人団体の普及を奨励し之をして家庭教育指導の中心機関たらしむること」と定められた[46]。

婦人団体には「母の会、婦人会、主婦会、母姉会並に同窓会等」がこれに該当し、「学校を中心として之を設置し必要に応じ連合会を組織すること」とあるように、学校を中心とした連合組織としての機能を期待された[47]。そこでは「婦人の修養、家庭教育、生活改善等に関する研究調査並に講習、講演、座談会等の開催を為さしむること」となり、積極的な「講習、講演、座談会等の開催を為」すことが通達された。しかし婦人団体の加入方法は、団体加入として求められる中、「団体員」は「婦人会員は女子の青年団員を除く」地元女性らで構成されることが決められたのである[48]。女子青年団と婦人団体は明確に区分された。女子青年団は、修養が求められたのである。

Ⅳ．安城と修養団活動

第一次世界大戦の終結した頃には、「大正民主主義」（大正デモクラシー）の隆盛期を迎えることになった。労働者運動、政治運動や普通選挙運動などさまざまな社会運動などが盛り上がりを見せるようになり、大都市が中心であったが、全国に波及した。その中で修養を通じて個人の精神を改造することを良しとし、社会をよくしようという考えが生まれてきた。修養を社会改良に結び付けた「修養団」が各地で活動を展開した[49]。安城のある碧海郡は修養団活動の拠点でもあり、「愛知県立農林学校」（のちの愛知県安城農林学校。現在の愛知県立安城農林高等学校の前身）がその中心を担った。修養団は1915（大正４）年から「天幕講習会」と題し、天幕で宿泊をしなが

41)『女子青年団修養の栞　愛知県連合女子青年団昭和十年三月改訂増補』（名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵）、26ページ。
42) 同上。
43) 同上、27ページ。
44) 同上、28ページ。
45) 同上、29ページ。
46) 同上。
47) 同上、30ページ。
48) 同上。
49)「修養団」は、1906年に東京府師範学校の学生であった蓮沼門三が創設した社会教育団体であり、校内で始めた「美化運動」が最初である「総親和」や「総努力」をスローガンに修養活動を展開した。蓮沼の思想である「道のひかり」を信条とし、日本主義による倫理の確立を目指すものである。修養団の機関誌は『向上』であった。2代目団長は平沼騏一郎であり、初代後援会長は渋沢栄一が就任した。SYD公式ホームページ（www. syd.or.jp）より抜粋。

ら、心身の鍛錬に努めた。天幕講習会には、愛知県立農林学校の生徒であった近藤良平、権田照次の2名が参加し、岡崎の愛知県第二師範学校の生徒であった杉原弥一郎もこれに加わった。農林学校では、近藤、権田の2名の勧誘活動により、修養団への入団者が増加し、やがて同校は修養団の愛知県支部に選定され、当時の同校校長山崎延吉が支部長に就任した[50]。

これにより安城は愛知県立農林学校を拠点に山崎延吉を中心指導者としながら、修養団の思想が普及していく基盤が構築された。農村の普及活動の一事例といえよう。

Ⅴ．雑誌を通じた教養の習得
―「処女の友」・「女子青年」・「青年（女子）」を中心に―

女子青年団の女性らは、教養をどのように習得していたのであろうか。神田より子によれば、大正期から昭和戦前期にかけて女子青年団員を対象とした『処女の友』(処女会中央部)、『女子青年』(財団法人社会教育協会)、『青年（女子)』などの雑誌が存在し、女子青年団員らが購読したと論じている[51]。神田によれば、『処女の友』は大正末期から昭和戦前期にかけて発刊された雑誌であり、1918（大正７）年11月10日に第1巻を発行し、1926（大正15）年には700万部を売り上げたいわれ、その後経営困難を理由に財団法人社会教育協会に権限が委譲された[52]。

ところが1927（昭和２）年に処女会中央部が解散となり、大日本連合女子青年団が設立される同会の機関誌『処女の友』が発行されることになった。同誌は90ページ程度菊版の雑誌であり、刊行当初は一部あたりの定価が20銭であり、経年するなかで15銭に値下げされた[53]。

『女子青年』誌は、新聞形式で発行され、全国の女子青年団に無料配布なされていた。1932（昭和７）年には増刷も行われ、翌年に大日本連合婦人会との共同で同誌は『女性往来』と改題し、24ページほどの雑誌として、女子青年団をはじめ高等女学校、婦人会等に無料配布されている[54]。

また『女子青年』は1939（昭和14）年4月に刊行が開始された。同誌は女子青年団幹部を対象としたものであり、のちに『処女の友』と両立していくことになった。創刊号は5万部、翌月号は7万部と売り上げを伸ばした[55]。

しかしながら『処女の友』と『女子青年』誌については、太平洋戦争開始前の1941（昭和16）年1月に廃刊となり、大日本連合女子青年団の機関誌として『女子青年』のみの発刊となった。ところが、同誌の売り上げは不調に終わっている[56]。同誌は社会教育協会が発行していたが、のちに青年館に権利が委譲されることになった[57]。

女子青年団員を対象とした雑誌も、戦時状況の激化に伴い、雑誌発行の継続が困難になったものと考えられる。

では雑誌の内容についてはどのようになっていたのか。「処女会の父」と称される天野

---

50) 山崎延吉（1873 ～ 1954）は、教育者、農学者であり、愛知県立農林学校の初代校長に就任した人物である。「日本のデンマーク」として安城が呼称されるような農業改善に努力した。同校長退職後は、全国各地の農村を巡回し、講演活動に励んだ。1930年には「安城女子専門学校」（現在の愛知学泉大学の前身）初代校長に就任し、女子学生への農業教育にも尽力した。その後、理想の教育の実現にむけて私塾の「神風義塾」を創設した。（岡田洋司『農本主義者山崎延吉』未知谷、2010年より抜粋）

51) 神田より子「日本における第一次世界大戦勃発に至る女子青年団とその雑誌の変遷（加納実紀代・研究代表者「日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B研究課題」「表象にみる第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」）14ページ。神田は、1920年代における処女会を青年団と並ぶ女子青年団として再編しようとする動きについて、「処女会から女子青年団へという成年女子団体の制度的・質的転換の可能性が地方レベルでも看取され、その準備が進められてきた」と記述している（同上、16 ～ 17ページ）。

52) 同上。

53) 同上。

54) 同上。

55) 同上。

56) 同上。

57) 同上。

藤男が編集人を務めた同誌では「地方処女会の相互連絡を図り、その擁護機関として、地方処女会の修得を奨め、働妻健母に必須の素養を授け、児童の擁護、故老の敬重、家庭の改善に適切な訓練を施し、郷土の繁栄を期し、都会と農村の実情を攻撃し、その調和発達を計り、処女の処世に活用し、特に田園婦人の自重自覚を奨励め、愛郷心を涵養し、安心立命の境地を開拓し、国運発展の根幹を培う事を目的とする」と「『処女の友』の主張」に掲載されている[58]。この主張から将来「田園婦人」になるであろう「処女」が読者の対象として捉えられ、処女らが「働妾健母」になるべく「必須の素養を授け、児童の擁護、故老の敬重、家庭の改善に適切な訓練を施し、郷土の繁栄を期し」ものであった[59]。安城では、女子のための農業補習学校設立計画が立案されていたが、財政上の問題から計画が頓挫していた。そのため農業補習学校に入学できない女子は、処女会や女子青年団に加入し、補習教育を受けることとなり、それらは農業補習学校の補完する役割をとして期待された。「働妻健母」なる言葉は、高等女学校の女子学生に求められたスローガンであった「良妻賢母」になぞらえているのであろうか。また彼女らは高等女学校に入学できなかったものの、地域の農村婦人として「家庭の改善に適切な訓練を施し、郷土の繁栄を期し」たのである[60]。

同誌創刊号の誌面は「諸国子守歌」、教訓お伽話「雀の恩返し」、「処女新聞」第1号論説、田園消息、草蛙の歌、格言、俚謡、嫁の押売（笑話）、懸賞判じ絵、地方通信、投稿募集の記事、編集便りなどが存在し、幅広い内容のものとなっていた。投稿募集では詩や短歌、俳句、絵画作品の投稿が可能となっていた[61]。また「家庭欄」では「お料理」について、「煮出しの取り方」、「季節料理法」、「食物の貯蔵法」などの料理に関する記事、「通俗科学講話」、「家庭農事」などの科学読み物や家庭での農事の知識に関する記事なども掲載された[62]。

年若い少女らが青春の時期を過ごす中で『処女の友』を講読しながら、知識や教養を身に付けていくことになった。女子青年団に属していた読者の一人は、「知識の習得をはじめ読み物が多く、一時の娯楽として感じさせずにはいられなかった。ますます精進しなければならないと確信した」という一読者の声からもわかるように、女子青年団員の教養雑誌としての意味合いがみてとれる[63]。

Ⅵ.「大日本青少年団」の結成と女子青年団の様相

1．男子青年団・女子青年団統合期におけるわが国女子青年団の状況

戦争の激化が続く中、1940（昭和15）年に「大日本連合女子青年団」は「団体数　一五、四九二団、団員数　一、五七三、八八七人、経費総額　一、四七八、〇九四円（地方連合団体数　七六九団）との報告がなされた[64]。また「事業概況」については「一、全国加盟団事務主任協議会　二、二千六百年記念令旨奉戴二十周年記念施設　三、銃後強化施設敬神献穀施設。生活刷新運動（生活改善＝衣食住、社交儀礼、娯楽）。生産拡充。家庭教育改善　四、軍事保護事業施設　戦没者遺族援護施設。出征軍人遺家族家庭強化施設。傷病軍人援護施設。傷痍軍人結婚相談施設（中略）七、体位向上施設。女子青年体力テスト。栄養知識の普及・全国体育大会参加施設　八、文書教育施設　九、家庭科学研究施設」と示されており「大日本青少年団」に吸収されてからも、以前と変わらぬ内容が行われていた。

58）『処女の友』創刊号、処女会中央部、1918年11月10日号。
59）同上。
60）同上。
61）同上。
62）同上。
63）「一青年団員女子A」の言葉。『処女の友』創刊号。
64）大日本青少年団史編纂委員会編『大日本青年団史』日本青年館、1970年、107～108ページ。

２.「大日本青少年団」の結成

1941（昭和16）年3月、「大日本青少年団二関スル件」（文部省訓令第2号）が発行された。団長には当時の文部大臣であった橋田邦彦が就任した。この訓令において、「大日本青少年団団長＝文部大臣」の統括の下で発足であった[65]。また組織の方針については「大日本青少年団は皇国青少年を錬成するを目的とするを以て、之が達成の為には其の組織機構をして我が青少年教育の根幹たる青年学校及び小学校と不離一体のもたらしめ、男女青年を通じて一貫したる訓練体制を樹立せざるべからず」と定められた[66]。女子青年団については以下のようなものであった[67]。

六、女子青年団に関する件
現下の我が国の情勢に伴ひ女子青年に負荷せられたる任務愈々重きを加へたるに鑑み、女子青年団の振興を図るは最も緊急なり。以て之が拡充に一段の努力を致し真に皇国女子青年たるに適切なる団体的実践修練を施すことに力めるべし。尚優秀なる婦人指導者の活動を以て其の実績の向上を図るべし

女子青年団は「真に皇国女子青年たるに適切なる団体的実践修練を施すことに力めるべし。尚優秀なる婦人指導者の活動を以て其の実績の向上を図るべし」とあるように、「団体的実践訓練を積むことで、「優秀なる婦人指導者」を育成していくことが企図された。ところが、男女青年団の合体により懸念することも存在した。大日本女子連合青年団の中心的指導者であり、活動に深くかかわった東京医科大学の創設者吉岡弥生は、「私には、たつた一つ危惧する点がありました。それは男女青年団が統一された場合、もしも女子青年と男子青年の指導を混同するやうなことはありはすまいか。勿論、国民としての共通の使命をもつている以上、ある程度同一の指導訓練は大切ですが、女子青年独自の特質使命をよく生かして、女子青年にぴったりした指導でなければならない（以下略）」と述べ、女子青年団の印象が薄れるだけでなく、女子青年に見合った指導が本当に行われるのか、疑問を呈している[68]。男子青年団に付随する形で女子青年団が活動している印象を受ける。しかしながら吉岡は「女子青年独自の特質使命をよく生か」すことが重要であると認識しなければならないと説いている。

３．戦時下の女子青年団

女子青年団は、大日本連合青年団に統合されたのち、戦時体制下に組み込まれていくことになった。1942（昭和17）年に「戦時家庭教育指導に関する件」が文部次官通牒により発令された。要綱はどのようなものであったのか。その内容を以下に見てみたい[69]。

戦時生徒教育指導要綱
１．我が国に於ける詠の特質の闡明並びに其の使命の自覚
２．健全な家風の樹立
　イ、敬神崇祖　ロ、敬愛、親和、礼節、ロ、謙虚　ハ、一家和楽　二、隣保共和
３．母の教養訓練
　イ．国家観念の涵養　ロ、日本婦道の修得　ハ、母の自覚　ニ、科学的教養の向上　ホ、健全なる趣味の涵養、強健なる母体の錬成
４．子女の薫陶擁護
　イ、皇国民たる信念の啓培　ロ、剛健なる精神の鍛練　ハ、弩弥なる情操の薫治、ニ、よき躾　ホ、身体の擁護鍛錬

65) 大日本青少年団史編纂委員会編『大日本青年団史』日本青年館、1970年、107～108ページ。
66) 同上。
67) 同上。なお引用資料の漢字については、執筆者の手により旧字体を新字体としている。
68) 吉岡弥生「嫁がせた母親の喜び―井上先生に後事を託すに当りて」（『処女の友』第４巻第3号、1941年3月）。
69)「戦時家庭教育指導に関する件」（文部次官通牒）、1942年10月。なお引用資料の漢字については、執筆者の手により旧字体を新字体としている。

５．家庭生活の刷新充実
イ．時局認識　ロ、家庭経済の国策への協力　ハ、家生活に於ける科学の活用　ニ、家族皆労　ホ、隣保相扶　へ、国防訓練　ト．家庭娯楽の振興

「２．健全な家風の樹立」について「イ、敬神崇祖　ロ、敬愛、親和、礼節、謙虚　ハ、一家和楽　二、隣保共和」と女性としてのたしなみや国家への忠誠が求められただけではなく、「３．母の教養訓練」として「イ．国家観念の涵養　ロ、日本婦道の修得　ハ、母の自覚　ニ、科学的教養の向上　ホ、健全なる趣味の涵養、強健なる母体の錬成」が求められた。女子青年団員としてのみならず、「母の教養訓練」も必要とされた。「母の自覚」のもと、「科学的教養の向上」や「強健なる母体の錬成」が大切とされ、いついかなる状況であろうとも良妻賢母の思想や学習する意識を忘れてはならない女性にとって大切なものであった。この影響をうけるかたちで、地方団では、「女子戦時生活指導者練成会」が企画された。以下に見てみたい[70]。

１．女子の体力錬成　女子体育の理念と実際　休養と和楽
２．栄養　戦時下の栄養
３．結核　結核の概念、結核予防
４．育児の問題　乳幼児の栄養、乳幼児の疾病、乳幼児の保護
５．母性保護　母性保護、勤労婦人と疾病、我が国の人口問題及び優性問題
６．戦時家庭生活の合理化　家庭生活概論、家庭管理、衣食住の合理化

上述のように、女子青年団の「生活指導者」対象に、「体力錬成」、「栄養」、「結核」、「育児の問題」、「母性保護」、「戦時家庭生活の合理化」と多岐にわたり講習されることになった。兵隊として戦地に赴く男性に代わり、強い女性と国土の防衛を担うことになった。母として女性としての知識の習得も求められていることがうかがえる。戦争が激化する中においても、女子青年団員の学習活動は求められ続けた。しかしながら女子青年団は、男子青年団と同じように、戦時体制に組み込まれ、やがて機能が低下していくことになった。

大日本女子青年団では、日中戦争以前から銃後奉公活動も取り組まれていたことから、安城の女子青年団においても指導者、生活改善への取り組みをはじめ、遠足や敬老会、寺社清掃なども行われた。さらに出征軍人への慰問文の作成と発送作業、軍人遺族の義援金募集活動などの軍事援護事業も行われた[71]。福釜地区・箕輪地区・赤松地区をはじめとする安城女子青年団第3分団では、武運長久の祈願祭、戦死者追悼、報国法要などの行事への参加はもとより、貯蓄報国運動、千人針の針縫いなどがおこなわれ、ますます戦時の激化に伴い活発化した[72]。慰問袋の作成や手紙や手ぬぐい、飴などを詰めて発送する作業については、女子青年団のみならず、国防婦人会、愛国婦人会などとともに実施された[63]。

安城町銃後奉公会主催の「兵隊さん感謝の会」では、「昭和十年十月四日正午」より「第一国民学校講堂」を会場に「各学校・工場・諸団体」後援で行われた。「出演種目と順序」を見てみると、「第一部」では「1表情遊戯　戦地の父ちゃん　国民学校　一二名」、「２舞踏　暁の決死隊　青年学校　二名」、「３同　弥次喜多道中　帝国製糸　二名」、「４同あかねの雲の燃ゆる頃　女子青年　七名」との記述がみられる[74]。「女子青年」はこのほかに「21　舞踏　春のおとずれ　女子青年　五名」、「22剣舞劇　白虎隊　女子青年　一七

70)「女子戦時生活指導者練成会」（1942年10月）。なお引用資料の漢字については、執筆者の手により旧字体を新字体としている。

71) 前掲16)、『新編安城市史』(通史編　近代）第3巻、579ページ。
72) 同上、580ページ。
73) 同上。
74) 安城市青年団協議会編『安城市青年団史』（第2巻）、1962年、185 ～ 186ページ。

名」、「第二部」では「２舞踏　仰ぐ忠霊塔　女子青年　七名」、「12舞踏　たてよ女性　女子青年　五名」、「18劇　男の花道（二場）　女子青年　一一名」とあり、「舞踏」や「剣舞劇」、「劇」などを披露している[75]。国民の娯楽が制限されるなかで、演劇が行われることで、セリフ覚えや立ち振る舞いなど日夜練習に励んだ「女子青年」の姿が浮かぶのである。

多くの女子青年団活動は、1943（昭和18）年頃には戦争の激化によりやむなく休止されていくことなった。再び表舞台に登場するのは第二次世界大戦後となり、新制青年団・女子青年団の再結成を待つこととなる。

Ⅶ．おわりに―安城女子青年団の学習活動の意義―

安城では近世より娘組が存在し、明治期の日露戦争後の1909（明治42）年に「女子会」の発足が起点となった。小学校教員の実施する補習教育・裁縫教育のような内容が実施された女子会は、やがて同窓会組織へと拡大発展し、これを基礎にしながら未婚女性対象の女子会や処女会の設置がみられるようになった。名士の講演や料理講習会等も実施され、農村女性の育成が図られた。1925（大正14）年に「安城町処女会」が結成され、1927（昭和２）年に「大日本女子連合青年団」の発足を受け、「安城町女子青年団」として改組された。婦徳の修養に努め他日良妻賢母たるの素質を養成する」ことが主眼とされ、料理や作法の講習会さらには見学旅行、軍事援護活動などの公的行事への参加を余儀なくされた。大正期になると女子青年団の活動が一層盛んとなり、地元碧海郡の説教場における5回にわたる講習会や、他県との交流修養会、蓮沼門三主催の修養団活動の影響により、女子青年団員においては「修養」が重視されていくことになった。

女子青年団員は修養に努めながらも、『処女の友』、『女子青年』誌などの修養を主とした女性教養雑誌を購読した。同誌読者として彼女らは「働妻健母」に必須の素養、児童の擁護、家庭の改善に適切な訓練を施す必要があるだけでなく、郷土の繁栄についても期待されることになった。それは彼女らが田園婦人として自重自覚を促すとともに、愛郷心を涵養することが目的とされた。

昭和期に入ると、軍部の台頭により、対外戦争を繰り広げる方針がとられた。それは満州事変からはじめる十五年戦争に直面することになり、とりわけ日中戦争の激化が続くと「大日本連合女子青年団」は、男子のそれと合体し、「大日本青少年団」として国家の組織として統合された。女子青年団はそれまでの農村婦人の養成から皇国女子青年として育成されるようにシフトチェンジし、団体的実践修練を通じて婦人指導者の育成が図られることになった。戦時体制は激化していくなかで、女性指導者としての知識の習得や演劇活動も行われた。そこでは女性青年団員として学習する姿勢は曲がりなりにも継続されていた。

安城女子青年団は、農村女性の育成方針を取りやめることなく、女性の教養としての学習活動も継続して取り組まれた。

なお第二次世界大戦の敗戦後になり、安城女子青年団がどのように再編され、役割を果たしたのかについて明らかにされていないこと、また安城の周辺の岡崎、西尾における女子青年団の動向などについても今後の課題としたい。

【参考文献】

１）新編安城市史編纂委員会編『新修安城市史』(第7巻、資料編近代)、2006年。
２）新編安城市史編纂委員会編『新編安城市史』(第6巻、資料編近世)、2006年。
３）新編安城市史編纂委員会編『新編安城市史』(通史編　近代)、2008年。
４）安城市青年団協議会編『安城町青年団史』(第4巻)、1988年。
５）安城市青年団協議会編『安城町青年団史』(第3巻)、1974年。

75) 安城市青年団協議会編『安城市青年団史』（第2巻）、1962年、186ページ。

６）安城市青年団協議会編『安城町青年団史』(第2巻)、1962年。
７）安城市青年団編『安城市青年団史』(第１巻)、1930年。
８）『女子青年団修養の栞　改訂増補』愛知県連合女子青年団、1935年。
９）『女子青年団修養の栞』愛知県連合女子青年団、1930年。
10）片岡重助『女子青年団指導教範』啓文社書店、1931年。
11）『日本のデンマークの姿　大正・昭和の農村復興』安城市歴史博物館、1997年。
12）『名古屋市連合青年団史』名古屋市連合青年団、1925年。
13）澤柳政太郎『愛知県青年団訓育読本　全』日進堂、1917年。
14）『優良青年団　大正10年度選奨』文部省学務局、1922年
15）中村徳五郎『人格修養大正青年及青年団講話』富田文陽堂、1917年。